

英語教育研究法セミナー

浦野 研 (北海学園大学)
田中 武夫 (山梨大学)
本田 勝久 (千葉大学)
高木亜希子 (青山学院大学)
和田 順一 (清泉女学院大学)

発表資料およびその他補足情報は、ウェブ上にも公開します。以下の URL をご利用ください。
<http://www.urano-ken.com/research/seminar/>

趣旨

本セミナーは、英語教育に関する研究をこれから始めようとする方や、既に研究を行っているものの、課題設定の仕方や研究手法等に自信の持てない方を主な対象に、研究を行う上で注意すべき点や取るべき手段など、特に研究方法に焦点を当てて提案、議論することを目的とする。また、既に英語教育研究を数多く行ってこられた方々にもぜひご参加いただき、活発な意見交換、質疑応答を期待したい。セミナー 1 は過去のセミナーと基本的に同内容の発表を、セミナー 2 はこれまでのものに新しいテーマも加え、発展的な内容としたい。発表内容および発表順は次の通り：

セミナー 1 : 25 日 (土) 10:30-11:30

- (1) 「よい研究」の条件と種類 (浦野 研)
- (2) 研究論文の書き方・まとめ方 (田中武夫)

セミナー 2 : 26 日 (日) 12:30-13:20 (昼食と共にお聞きください) (3 会場で同時進行)

- セミナー 2 A 量的研究デザインの方法 (本田勝久)
- セミナー 2 B 質的研究デザインの方法 (高木亜希子)
- セミナー 2 C (1) 紀要データベース『あゆみ』の活用例 (和田順一)
- (2) 効果的なタイトルと要旨 (浦野 研)

「よい研究」の条件と種類

浦野 研 (urano@ba.hokkai-s-u.ac.jp)
北海学園大学

1. 研究の目的

1-1. なぜ研究をするのか

- 仕事だから？就職・転職・昇進のため？知的好奇心？

1-2. 研究 (research) とは

- *Research is a systematic process of inquiry consisting of three elements or components: (a) a question, problem, or hypothesis, (b) data, and (c) analysis and interpretation of data. (Nunan, 1992, p. 3)*

1-3. 研究の目的（ゴール）

- 自分の授業をよくするため → アクションリサーチ
- 自分の授業の向上のみを目的とせず、一教室レベルを超えてより一般化されたものを目指す → 他の研究や関係者に影響を与えることを目標とする

よい研究の条件1. ひとりよがりでないこと

- ひとりの研究者が一生涯にできることは限られている。ごく一部の人間を除いて、自分ひとりで新しい研究領域を開拓し、確立するという野心は持たない方が賢明。
- 自分の研究と他の研究との関連性を明確にできない場合、自分以外の研究者に認知してもらえない可能性が高い。
- 英語教育研究というフィールド全体の発展に貢献する研究を行うことが重要。自分の研究が他の研究とどのように関連しているかを意識する。一つ一つの小さな研究結果の積み重ねが、フィールドの発展、前進へとつながる。
- 関連して、常に全体像への意識を失わない。「英語教育」という地図があったとしたら、自分の研究活動が何丁目何番地で行われているのかを認識する。

2. 研究の手順

2-1. 研究テーマの選定（研究の出発点）

- 英語教師として、また英語（や他の外国語）学習者としての自分の経験や関心
- 大学（院）の授業や研究会等
- 学会発表等、またそれらをまとめた研究誌、論集等
- 英語教育に関する先行研究や、それらを概観した書籍
- 文献データベース（CiNii, EBSCO Host, Science Direct, IngentaConnect, ERIC, Google Scholar 等）
- 英語教育関連分野（心理学、教育学、言語学等）の先行研究や、それらを概観した書籍

2-2. 研究課題の絞り込み、関連づけ（先行研究の分析）

- (1) 選定したテーマが、英語教育研究ではどのような切り口で扱われているのかを把握する。該当する関連研究がない場合には、（可能性はとても低い）その観点がとても斬新で画期的なものであるか、英語教育研究としてはあまり「面白くない」ものであるかのどちらかであることが多い。（よい研究の条件1を参照。）
- (2) これまでの研究で、何が調査されてきたか、これまでに何が判明しているのか、また何がわかっていないのかを検討する。
- (3) これまでの研究の問題点（理論的欠陥、方法論的問題等）を検討する。
(1) - (3) がいわゆる文献研究のプロセス
- (4) (2) と (3) をもとに、自分が何を研究すべきかを導き出す。

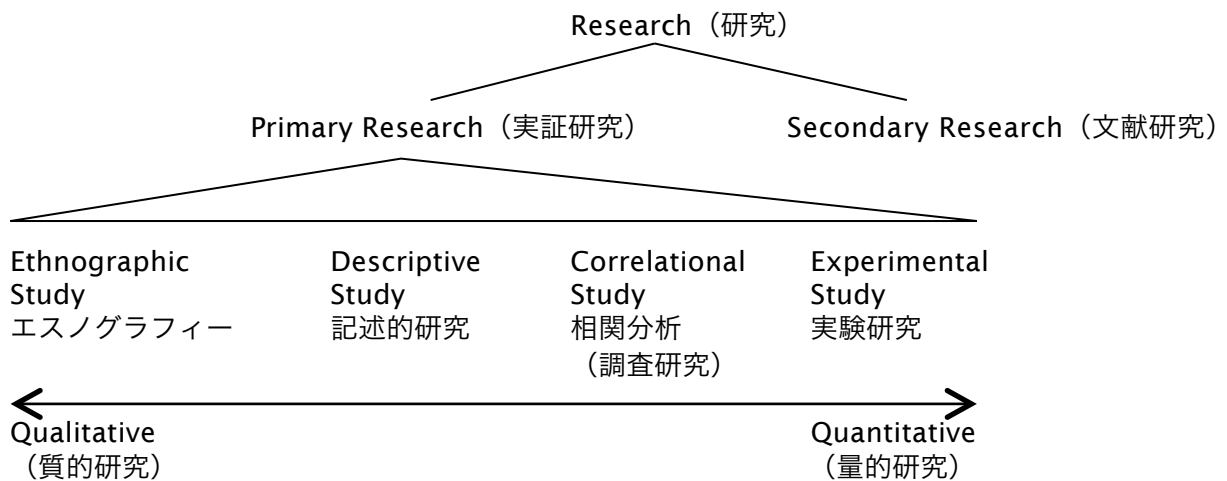
2-3. 研究手法の選定

- (1) 先行研究の分析をもとに、今回の研究で扱う研究課題（research question）を確定する。
- (2) Research question の答えを導き出すのに最もよいと思われる手法を選択する。「はじめにアンケートありき」や「はじめに実験ありき」ではなく、「この research question には、この手法」といった手順で検討することが重要。

よい研究の条件2. よい意味で simple であること

- ひとつの研究で全ての答えが出るわけではない。
- 多くの research questions、多くの要因を取り入れた研究は、複雑で解釈の難しい結果を産み出す。
- 実証研究で扱う要因は、(先行研究、文献研究の段階で) 理論的に議論されたもののみが好ましい。「性別」や「上位群、下位群」などを要因に入れる研究があるが、本当にそれらを含める必要があるかが議論されていない場合が多い。研究で扱う要因については、原則的にはその全ての正当性をあらかじめ議論する必要がある。ただし仮説生成型の質的研究(後述)では、データ収集過程で必要に応じて修正を行う。

3. 研究の種類



Brown (1988) と Seliger & Shohamy (1989) をもとに作成

よい研究の条件3. よい意味で conservative であること

- 論理の飛躍がないこと。
- 自分の研究結果以上の結論を導き出したり、研究結果とは直接結びつかない教育的示唆を述べたりしないこと。
- 「考察」「結論」のセクションでは、それ以前に提示されていない考えをあまり持ち込まない。結果の報告以降は潔く、簡潔に。(基本的には research questions もしくは仮説に対する答えを出し、そこから導き出される conservative な示唆を述べるだけにする。)

4. 研究のまとめ、発表

4-1. 情報発信のすすめ

- 研究は、人目に触れないと意味がない(よい研究の条件1を参照)
- 口頭発表も大切だが、やはり論文執筆&掲載が重要(口頭発表の聴衆<論文の読者)
- 発行部数の多いジャーナルに投稿する(より多くの人に見てもらいたい)
 - インパクトファクター(IF)という考え方

- 研究領域の近い人に見てもらおう（できれば引用してもらいたい）
- ウェブによる自己発信（Google の威力はあなどれない）
 - 未発表の論文や、発表時に作成した配布資料の掲載等

4-2. 論文の書き方（某ジャーナルの審査項目）

- | | |
|--------------------|----------------|
| (1) 読者の興味関心に合った内容か | (5) 議論・分析と結論 |
| (2) 提示された問題の適切さ | (6) 論文執筆力 |
| (3) 先行研究提示の適切さ | (7) APA スタイル準拠 |
| (4) 研究の枠組み、手法、手続き | (8) 総合的にみた論文の質 |

5. 参考文献

5-1. 研究法全般に関する書籍

- (1) Seliger, H. W., & Shohamy, E. (1989). *Second language research methods*. Oxford: Oxford University Press. [ハーバート・W・セリガー&イラーナ・ショハミー（著）、土屋武久・森田彰・星美季・狩野紀子（訳）（2001）. 『外国語教育リサーチマニュアル』東京：大修館.]
- (2) Nunan, D. (1992). *Research methods in language learning*. Cambridge: Cambridge University Press.
- (3) 南風原朝和・市川伸一・下山晴彦（編）（2001）. 『心理学研究法入門—調査・実験から実践まで』東京：東京大学出版会.
- (4) Brown, J. D. (1988). *Understanding research in second language learning: A teacher's guide to statistics and research design*. Cambridge: Cambridge University Press.
- (5) Porte, G. K. (2002). *Appraising research in second language learning: A practical approach to critical analysis of quantitative research*. Amsterdam: John Benjamins.
- (6) Brown, J. D., & Rodgers, T. (2002). *Doing second language research*. Oxford: Oxford University Press.

5-2. 英語教育研究の動向に関する書籍

- (7) Schmitt, N. (Ed). (2002). *An introduction to applied linguistics*. London: Arnold.
- (8) 小池生夫（監修）、SLA 研究会（編）（1994）『第二言語習得研究に基づく最新の英語教育』東京：大修館.
- (9) 小池生夫（編集主幹）、寺内正典・木下耕児・成田真澄（編）（2004）. 『第二言語習得研究の現在：これからの外国語教育への視点』東京：大修館.
- (10) 白畑知彦・富田祐一・村野井仁・若林茂則（2009）. 『改訂版 英語教育用語辞典』東京：大修館.
- (11) Long, M. H., & Doughty, C. J. (Eds.). (2009). *The handbook of language teaching*. Oxford: Wiley-Blackwell.

5-3. 主な文献データベース

研究者名やキーワードを入力することで関連する論文が検索できるサービス。有償または無償で論文が PDF ファイルでダウンロードできる（大きな大学の図書館等でアクセスすると無料でダウンロードできる可能性が高い）。CiNii は日本の論文が、それ以外は海外の論文が検索可能。検索範囲の広さでは Google Scholar がおすすめ。Google Books では英語の書籍検索ができ、全ページではないものの立ち読み感覚で閲覧も可能。

- (12) 論文情報ナビゲータ 国立情報学研究所 (CiNii) [<http://ci.nii.ac.jp/>]
- (13) EBSCO Host [<http://search.ebscohost.com/>]
- (14) ScienceDirect [<http://www.sciencedirect.com/>]
- (15) IngentaConnect [<http://www.ingentaconnect.com/>]
- (16) Educational Resources Information Center (ERIC) [<http://www.eric.ed.gov/>]
- (17) Google Scholar [<http://scholar.google.com/>]
- (18) Google Books [<http://books.google.com/>]